白銀南中

目標をもって、主体的に学ぶ生徒の育成

～キャリア教育との関連を図った指導を通して～

（３年計画の３年次）

校　長　　伊 崎　　己 治

１　研究主題について

本校は昨年度まで２年連続で「授業における課題設定と振り返りの工夫を通して」を副題として設定し、「目標をもって、主体的に学ぶ生徒の育成」を目指した取組を行った。各教科・領域の授業において、各学年１回ずつの研究授業を行い、「課題設定」と「振り返り」の意義と方法を共有し、生徒の意欲向上につなげることができた。また、３学期に行った１人１台端末を活用した道徳の授業は、生徒が端末に入力した意見を教室前面のモニターに表示して共有し考えを深める、という実践で、「振り返り」が充実したものになった。この２年間の研究により、「課題設定」と「振り返り」を工夫することにより、生徒が自分自身を客観的に見つめ、その授業で身につけるべき力を捉え、意欲の向上が期待できるという成果を得ることができた。

今年度の校内研究の副題は、「キャリア教育との関連を図った指導」である。「キャリア教育の指針〈実践編〉」（青森県教育委員会、平成２６年３月）によると、「各教科で学ぶ内容が『日常生活のどんなところに活用されているのか』『その知識を必要とするのはどんな職業か』『社会に出たときにどんな場面で役に立つのか』などを、単元の導入やまとめの段階に加味して教えたり、本時で学ぶ内容を実際に活用している職業人の話を聞かせたりすることで、学習内容と日常生活・職業・将来との関連付けを図ることができる」とあり、「キャリア教育の視点を生かした学ぶ内容からのアプローチを、授業改善の手立てとして取り入れていくことは、児童生徒の主体的な学びへの促進へとつながっていく」とある。これまで２年間取り組んできた「単元の導入やまとめの段階」の「課題設定」と「振り返り」の工夫に加え、前述の「キャリア教育の視点」を加えることができれば、「主体的に学ぶ」態度の育成に一層の効果が期待できるのではないかと考える。

また、以前から本校で取り組んできた「わかる授業づくりのための５つの視点」（①本時の目標や指導過程の明確化、②具体的で分かりやすい指示・発問、③構造化された板書や視覚に訴える教材の提示、④肯定的な評価の実施、⑤学習の連続性を指示）を継続し、これについても「キャリア教育との関連を図った指導」につなげていきたい。

２　研究のねらい

授業における「課題設定」と「振り返り」の工夫に加え、キャリア教育との関連を図った指導を通して、生徒の主体的に学ぼうとする意欲や態度を育てる。

３　研究仮説

各教科及び領域において、キャリア教育との関連を図った指導を行うことにより、生徒が主体的に学習に取り組めるようになる。

４　研究の内容

これまでの「課題設定」「振り返り」の工夫に加え、キャリア教育との関連を図り、次のいずれかの視点を意識した授業づくりを推進する。また、その視点に基づいた授業研究を複数回実施することにより、教師の授業力の向上を図る。

(1) 生徒が自分と異なる意見を受け入れながら、自分の考えを適切に伝えることができる話合い活動の工夫
(2) 生徒が課題や問題に対してよりよい方法等を見つけることにつながる「課題設定」と「振り返り」の工夫
(3) 生徒が学ぶことや働くことの意義を自分の生き方と重ねて考えることができる単元の指導の工夫

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	内　　容
６	２	小中ジョイントスクール推進事業　中学校の授業公開
７	７	第１回授業研究（３学年・総合）
１０	７	教育指導課・総合教育センター計画訪問　※中止 第２回授業研究（要請訪問・保健体育）　※中止 １学年　授業者　教諭　嶋守健太郎
１１	５	小中ジョイントスクール推進事業　小学校の授業参観
１１	８～１５	授業見せ合い週間
２	１６	第３回授業研究（２学年・道徳）

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
４	５	全体会（研究についての共通理解）
４	２１	配慮を要する生徒に関する情報交換・共通理解
５	２６	１人１台端末に係る研修　　講師　木村和光　教諭
７月下旬		中学校教育課程研究集会（各教科・領域部会にて配付資料の読み合わせ）
７	３０	・生徒指導に係る研修　「ＳＯＳの出し方教育」 講師　青森県総合学校教育センター教育相談課　工藤直子　指導主事 ・ＮＲＴ結果分析の共有
１１	３０	全体会・教科部会（今年度の成果と課題）
１	１１	配慮を要する１・２学年の生徒に関する情報交換・共通理解
１	２０	「心のケア研修」　講師　八戸学院大学短期大学部　野口和也　教授

６　研究の成果

(1) 毎月の生徒アンケート（４段階評価）で３と４の段階を合わせたものを高評価とし、１学期と２学期の高評価の割合の差が最も大きい月を学年平均で比較したところ、「その時間の学習目標や、将来どんなことに役立つのかを意識して授業を受けた」については１学年が 88.8%から 96.3%(7.5%増)、２学年が 81.7%から 91.8%(10.1%増)、３学年が 71.9%から 91.2%(19.3%増)となった。また、「話合い活動に参加し、積極的に意見を伝え合った」については、１学年が 87.8%から 96.4%(8.6%増)、２学年が 83.2%から 92.4%(9.2%増)、３学年が 80.0%から 88.2%(8.2%増)となり、今年度の研究に一定の成果があったものと考えられる。

(2) ７月の授業研究では、本校でこれまで取り組んできた「課題設定」「振り返り」の工夫に加え、キャリア教育の視点を取り入れた話合い活動や、学ぶこと・働くことの意義を考えさせることのできる授業が展開され、参考例として教員全体で共有することができた。

(3) 昨年度の課題「教員相互の見せ合い授業の活性化」を図るため、「授業見せ合い週間」を設定した。全ての教員の授業を全ての教員が参観できる環境を整えたことで、多様な実践を共有でき、その後の授業改善に役立てることができた。

(4) 全体での配慮を要する生徒に関する情報交換・共通理解を２回、外部講師による「ＳＯＳの出し方教育」、「心のケア研修」を開催することによって、生徒の行動の意味や接し方について学ぶことができた。

７　研究の課題

これまでの研究に一定の成果は得られたが、「目標をもって、主体的に学ぶ」ことについては課題が残されたと考える。例えば、２学期に行った学校評価アンケート（４段階評価）では、「目標をもち、計画的に学習しているか」の項目において、生徒の２０％、保護者の４０％、教職員の５０％が低評価（２または１の段階）となっている。

今後の授業改善に当たっては、生徒の興味・関心を喚起するようなはたらきかけに加えて、各教科等の特質を生かした問題解決的な学習を取り入れ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりが必要と考える。

（記入者　山道　律人）